

(University of Florida,¹ 東大院工,² Virginia Tech³)○塩崎 亨,^{1,2} 神谷 宗明,¹ 平田 聡,¹ Edward F. Valeev³

[序] 波動関数の記述における電子間距離 (r_{12}) の自由度の取り込みの重要性は1929年に Hylleraas によって指摘されたが、近年の理論面での進展によって r_{12} 自由度を含んだ電子状態計算 (R12 法) がようやく可能になりつつある。この R12 法を MP2 法と組み合わせた MP2-R12 法¹ では、補助基底を用いた RI 近似² と Slater 型相関因子³ を用いることで、triple- ζ 基底関数を用いて quintuple- ζ 基底関数以上の精度の絶対・相対エネルギーを得ることができる。この MP2-R12 法の計算誤差の大部分は MP2 で取り込めない電子相関によるものであるため、さらなる精度の向上のためには R12 法をより洗練された電子相関法である結合クラスター法 (CC) に適用することが必要となる。CCSD 法に R12 法を組み合わせた CCSD-R12 法は、Noga らによって“標準近似” (SA) の元で初めて導出・実装された。⁴ SA は方程式を劇的に簡略化するが、オービタル基底関数 (OBS) を用いて RI 近似を行うことに相当するため、結果として大きな OBS が必要となる。それとは別に、近年 CCSD-R12 法を線形化した CCSD(R12) 法が定義され、補助基底による RI 近似を用いて実装された。

しかしながら、その複雑さゆえ、CC-R12 法のダイアグラムをすべて取り込んだ上で、かつ補助基底によって RI 近似の誤差をコントロール可能な方法は、高次 CC-R12 法はもちろん最低次の CCSD-R12 法ですらこれまで存在しなかった。そこで我々は本研究において、R12 法を処理可能なコンピュータ記号代数コード SMITH を新たに開発し(従来の TCE は R12 法を取り扱うことのできない)、ダイアグラムを全て含む完全な CCSD-R12, CCSDT-R12, そして CCSDTQ-R12 法の実装を初めて行い、それぞれの方法の評価とそれらに対する近似法[CCSD(R12) 法など]の妥当性の検証を行った。

[方法と実装] CC-R12 法の波動関数は、

$$|\Psi\rangle = \exp\left[t_i^a \{a^\dagger i\} + \frac{1}{4} t_{ij}^{ab} \{a^\dagger b^\dagger ji\} + \dots + \frac{1}{8} \hat{Q}_{12} F_{kl}^{\alpha\beta} t_{ij}^{kl} \{\alpha^\dagger \beta^\dagger ji\}\right] |0\rangle$$

と定義され、未定定数は t である。ただし i, j は占有軌道、 a, b は OBS で表現される非占有軌道、 α, β は仮想的な完全基底における非占有軌道を示し、 $|0\rangle$ は参照配置を表す。導かれるテンソル積にで書かれた方程式の一例を図 1 に示す。添え字 α, β を持つテンソルは直接扱えないので、重要な 2 電子中間テンソルを解析的に取り扱う一方、多電子積分は RI 近似を用いて評価する。 F は相関因子の二電子積分であり、本研究では相関因子に $\exp(-1.5r_{12})$ を用いた。SMITH はこのような方程式を自動的に導出し、最適な中間テンソルを決定し、Fortran などの実行コードを生成することが

